

自然体験論

農山村における自然学校の理論

野田 恵

はじめに

近年、農山村における自然体験学習が重要性を増している。指導者がいて、継続した自然体験学習を提供する自然学校は、いまや約 3,000 を超えるといわれている。その多くは農山村にあり、都市に住む子どもや若者、家族を対象としたプログラムを行っている。そのため、都市農山村交流の拠点とも見られている。さらに、環境教育においてはこの自然学校が、持続可能な社会の実現を目指す教育実践として注目されている。環境教育における自然体験学習の今日的到達点が、この自然学校であるといってもよい。

そもそも、生態学的に見ると都市が独立して存在することはあり得ない。例えば水資源ひとつとってみても、都市は原流域にある林野、農山村に大きく依存しているのである。さらに、国土の大部分が山地である日本において、都市に暮らす人が農山村の自然とどのような関係を築くのかは、持続可能な社会を構築するうえで欠かせない視点だといえる。そのため、農山村と都市住民を結ぶ拠点としての自然学校は注目に値するといえる。

さらに自然学校が、農山村地域の環境＝自然や、地域文化を破壊することなく活用しながら、地域に経済的にも貢献している事例が報告され始めている。持続可能な社会を実現するためには、環境・経済・社会の 3 要素が重要であるといわれているが、自然学校を中心とした地域づくりは、農山村地域の持続可能な発展のモデルとなりうるのではないかと、として関心が集まっている。加えて、自然体験学習がもたらす都市農村交流によって、農山村の住民が地域の良さを見直す、地域への愛着が深まる、自分自身の人生を肯定的にとらえる、といったある種の「教育的」効果についても意義が見出されている。このような自然体験が与える地域への影響については、実践報告を多く見ることができるし、近年では実証的研究も着手されている。

しかしながら、今日の環境教育における農山村の自然体験学習の評価は、農山村地域への影響ばかりが強調されている。肝心の都市の子どもたちが農山村という場所に一時的に滞在し、体験学習を行うことにどの

ような意義があるのか、理論的には十分説明されていない。

例えば、なぜ農山村に行く必然性があるのか。都市の子どもにとって農山村での自然体験は、都市に残された自然の中での経験とは異なる、独自の意義があるのか。あるとしたら、それはどのようなことか。管見の限り、このような一連の疑問に明確に答えたものはない。だが、都市の子どもにとっての意義が明らかにならなければ、自然学校に参加する子どもたちの経験や学びが、農山村の持続可能性を実現するための手段となりかねない。だから、農山村の自然体験学習が都市の子どもたちにとって、なぜ意義があるのか理論的に解明されなければならない。そうでなければ、農山村の自然体験学習への賛同や支持も広がらないであろう。

そこで、本書では「経験」概念の理論的検討を通じて、環境教育で行われている自然体験学習の意義、特に都市の子どもたちが農山村に一時的に滞在して行う自然体験学習の意義を明らかにする。なぜ、「経験」概念に着目したかといえば、農山村の自然体験の意義が理論的に解明されていない理由のひとつに、「経験」概念の射程の狭さがあると考えたからである。すなわち、従来の教育学が「経験」をもっぱら「日常」における問題の対処に役立つものとしてとらえてきて、例えば都市の子どもが農山村という普段と異なる場所で一時的に行う「非日常」的経験の意義に着目してこなかったからではないだろうか。

本書では、意味ある経験とはどのようなものか、「日常的経験」と「非日常的経験」のそれぞれの意義と構造を明らかにし、農山村の自然体験の独自の意義を解明する。環境教育・自然体験学習のハウツー本ではないが、自然体験の意義を理論的に明らかにすることは、実践の指針となり自然体験学習の質の向上に役立つ。さらに、明らかにされた意義ある経験の観点は、環境教育における多様な自然体験学習の意義と方向性を示す手がかりにもなることが期待される。

本書は、2010年3月に、東京農工大学に提出した学位論文『環境教育における「経験」概念の研究 ―農山村における自然体験学習の経験主義的基礎づけ―』に若干加筆を行ったものである。

各章の扉には、その章の概要・解説を付した。各章の内容は連続して

いるが、章ごとに独立した内容となっている。また、「おわりに 一総括にかえて一」で、各章の概要と筆者の主張を簡潔にまとめた。本書の全体像を手っ取り早く知りたい方は、まず「おわりに」から読んでいただいてもいいだろう。ただ、各章ではなぜそのような議論を行うのか、背景や課題を丁寧に論じた。読者の関心に合った章から読んでいただければよいと思う。

自然体験が重要性を増す中、環境教育研究者や農山村の自然学校関係者はもちろん、都市や学校教育において自然体験を実践する方々、これから環境教育分野での研究や実践を志す学生諸氏に本書を活用していただければ幸いである。

野田 恵